



Title	〈図書紹介〉藤田治彦『もっと知りたいウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』
Author(s)	清水, 愛子
Citation	デザイン理論. 2009, 54, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53478
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤田治彦『もっと知りたいウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』

東京美術 2009年

清水愛子／京都精華大学非常勤講師

装飾芸術の分野で新境地をひらき、「モダンデザイン」の先駆者」とも称されるウィリアム・モリスの活動について、その生涯にふれながら、多彩な図版を駆使して、全容を解き明かそうと試みたのが本書である。同時に、モリスの活動の影響を受けて発展していくアーツ&クラフツ運動の歴史的な位置づけも試みられており、奥行きと広がりとを併せもった内容となっている。

本書によると、モリスは単に表象的なデザインにとどまらず、素材から制作工程にまで目を向けている。同時に作品づくりの基本技術の開発や量産化に成功するなど、極めて先駆的な活動を行ったことがうかがえる。モリスの関心が芸術という範疇に留まらず、社会のあり方にも及んでいたことが紹介されており、総じてモリスの活動範囲の広さが伝わってくる内容となっている。

また、本書の特徴は、モリスの活動と同様にその立体的な構成にある。結構なボリュームがあるにもかかわらず、写真図版を多く掲載したり、関連事項の詳細な内容についてはコラム・エピソード欄、特集として分けるなど、初学者でも読み進めやすい工夫がなされている。作品に関する図版も数多く掲載されているため、図録的に作品だけを見ながら読み進めることも可能である。さらに、章ごとにモリスの活動や歴史的事項が年表で示されていることから、活動内容を時系列にそって容易に理解できる点も本書の魅力のひとつである。

次に、各章の概要についてふれておこう。章立ては以下のとおりである。

- 第1章 若きモリスとアーツ&クラフツ前史 — 良き仲間たちとの出会い
- 第2章 生活に美と創造の喜びを — 商会設立から改組まで
- 第3章 理想の社会をめざして — 環境保護運動への展開と社会主義
- 第4章 十人分を生きた晩年 — アーツ&クラフツとケルムスコット・プレス
- 第5章 アーツ&クラフツ運動の広がり — ロンドン発の穏やかな世界革命とその理念
- おわりに アーツ&クラフツ運動の歴史的な位置づけ

〈第1章 若きモリスとアーツ&クラフツ前史 — 良き仲間たちとの出会い〉では、モリスの生い立ちからはじまり、26歳までの活動が紹介されている。ここではモリスがどのような経緯で「装飾芸術」に興味をもつようになったのか、人物像を垣間見ながら、後の活動につながる原点を探っている。まず「良き仲間たちとの出会い」とサブタイトルにあるように、画家エドワード・バーン・ジョーンズ、建築家フィリップ・ウェップ、モリス商会の共同経営者となるチャールズ・フォークナーなど、モリスの活動に深く関わる人物達との出会いが、既にこの時期にあった。その他、20代前半の頃よりカリグラフィーや刺繍を始めていること、新居レッドハウスを完成させ共同制作によって一つのものを作り上げる体験を重ねるなど、モリスの活動の基盤がいかにして作られたかがうかがえる。

〈第2章 生活に美と創造の喜びを〉では、モリス・マーシャル・フォークナー商会を設立した27歳から41歳までの活動が紹介されている。モリス・マーシャル・フォークナー商会では、ステンドグラスや家具、壁紙、手描きタイルなどの下絵やデザインを仲間で分担して手がけ、生活に根ざした新しく美しい室内空間を生み出していった。その中でモリスは一人一人の才能や持ち味をうまく引き出すべく巧みに采配し、ディレクター的な役割を際立たせていった。同時に、視覚的なデザイン性に終止するのではなく、作品を作る技術的な側面にも徹底してこだわった。例えば、染色作品では、新しく便利な機械の導入を嫌い、自らのデザインを天然染料と伝統的な木版刷りで仕上げるべく開発に取り組み、成功させている。この一例からもものづくりの原点から見直す視点を持っていたことがうかがえる。

〈第3章 理想の社会をめざして〉では、モリスの充実期に該当し、社会と環境にまで活動領域を広げていった42歳から53歳までを紹介している。この頃になると、モリスは、社会主義活動に参画し、社会と芸術に関する講演を多数行なうようになる。さらには壁紙のデザインを充実させ、インディゴ染めの開発に成功するなど、新たなテキスタイル作品を次々に生み出していく。そして、次に手がけたのが「織り」であった。タペスリーを4ヶ月かけて自力で作り上げ、続いて商品化を試みるなど、絶え間なく活動領域を拡大させていったのである。

〈第4章 十人分を生きた晩年〉では、54歳から62歳で生涯を終えるまでの晩年の活動が紹介されている。その代表的なものとして、モリスの影響を受けた若い世代がはじめたアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会とのかわりや、自ら設立したケルムスコット・プ

レスの出版活動をあげている。その内容から若い芸術家との交流によって設立した私家版印刷工房では、自ら草案した活字書体、特性の手漉き紙やインキなど、とことんこだわった究極の書物を手がけていたことがわかる。こうした常に自分の手で確かめながら新たな作品開発に没頭するモリスならではの活動は、出版物という形で結実し、フィナーレを向かえる。

〈第5章 アーツ&クラフツ運動の広がり〉では、モリスの思想と活動が、後の芸術世界にどのような影響を与えたのかについて具体的に示されている。まず、19世紀後半から20世紀初頭にかけて芸術的な社会運動としてイギリス全土に広がったアーツ・アンド・クラフツ運動へと波及し、その後、スコットランド、アイルランド、ヨーロッパ大陸へと広がり、さらにはアメリカや日本の民芸運動にいたるまで影響が及んだことを指摘している。これら全世界に及ぶ活動を国際アーツ&クラフツ運動として捉え、それぞれの特徴を紹介している。

〈おわりに〉では、アーツ&クラフツ運動の歴史的な位置づけがなされている。まず、印象派と比較がなされ、印象派がパリでおこった絵画という枠内の表現上の革新運動であるのに対し、アーツ&クラフツ運動は、イギリスでおこった芸術全体の枠組みを革新する運動であるという。さらに、その後それぞれがヨーロッパ諸国へと広がり、この両者の運動の波が会うところに20世紀を代表する芸術作品が生まれたというのである。そうだとすれば、20世紀以後の現代において、革新的な活動を行うにあたっては、モリスがとった方法から多くを学ぶことができるだろう。